

# 研 究 紀 要

第 7 号

1990

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 目 次

- デポの意義 .....栗島 義明( 1)  
—縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖—
- 立野式土器についての一考察 .....中島 宏( 45)
- 東国における後期古墳 .....山本 禎( 67)  
—凝灰岩を石室構築材とした横穴式石室—
- 中田以前の土師器研究 .....大屋 道則( 93)  
—編年研究の原則と分類方法の変遷—
- 瓦塔瞥見 .....高崎 光司(209)
- 古代～中近世の井戸跡について(1) .....鈴木 孝之(217)  
—埼玉県における形態分類を中心として—
- 北武蔵における古瓦の基礎的研究IV .....昼間孝志・宮 昌之(273)  
木戸春夫・高崎光司  
赤熊浩一

# 東国における後期古墳

## 一凝灰岩を石室構築材とした横穴式石室について一

山 本 禎

### はじめに

後期古墳の内部構造として横穴式石室が導入され、各地において様々な形態・石材を用い構築されている。

県内においても、河原石・角閃石安山岩・凝灰岩・緑泥片岩を用いて構築された古墳があり、入手し易い石材を用いたという地理的条件だけでは理解できない点がある。同一古墳群内においても異なる石材の石室が混在するし、数種類の石材を用いる古墳も存在する。石材によっては広範囲の分布をもつものもあり、石材の流通経路・石材供給地において政治的力学が働いていることが考えられる。

比企地方においては、凝灰岩切石を用いた石室が分布する地域で、凝灰岩を用いる古墳は大宮台地西縁の荒川左岸流域にまで拡がっている。更には入間川流域の河原石を主体とする地域にも散在している。凝灰岩を石室構築材とする石室の構築法からその系譜を探り、古墳築造の背景に触れてみたい。

### 古墳の概観

比企地方において、槻川の上流の山間部にあり、槻川の沖積地を見おろす丘陵上に穴八幡古墳が位置する。円墳で径24.5mを測り、内部構造は横穴式石室で、付近の下里で産出される緑泥片岩の一枚石を用いて構築されたものである。複室構造をもつもので河袖型の矩形の石室である。

向原古墳群は、都幾川によって解析された松山台地の南縁にあり、松山台地が小川町の起伏に富んだ地形から平坦な河岸段丘に移り変わるところに位置する。第1号墳～第3号墳の3基の内部構造は胴張りの横穴式石室である。第1号墳は楕円形を呈しており、第2号墳・第3号墳はいわゆる徳利形を呈している。石室構築材は、いずれも緑泥片岩と河原石を用いている。

寺山古墳群は、向原古墳群の東方に位置する。内部構造が確認されたものは7号墳だけである。河原石を乱石積みした胴張りの横穴式石室であるが、緩やかな胴張りである。

西原古墳群は菅谷台地から松山台地へ緩傾斜する菅谷台地の東端に位置する。第1号墳・第3号墳は円墳で、内部構造は緑泥片岩と河原石を用いて構築したもので、胴張りを呈する。いずれも緩やかな胴張り第1号墳は基本プランは台形を推定させる。副葬品は、第1号墳より圭頭大刀と銅鏡が出土しており注目される。

屋田遺跡の属する月輪古墳群は北比企丘陵の裾を流れる市の川の右岸の台地上に位置する。月輪古墳群は、分布の状況から5～6支群に区別され、石室を主体とする支群が1つにたいし石室以外の主体部が大部分を占める支群が3～4と考えられている（高柳 1964）。屋田遺跡でも9基の古墳

が調査され、いずれも円墳である。5世紀前半より構成されたと考えられ、内部構造は土壇・ローム棺・壺棺・円筒埴輪棺などである。横穴式石室を内部構造とするものは屋田5号墳で、東京大学考古学研究室が昭和26年に調査を実施した「月輪第1号墳」（東京大学考古学研究室 1964）に相当する古墳である（今井 1984）。石室は凝灰岩の切石を用いた初現的な短冊形の石室であり、埴輪をもつものである。

寺ノ台遺跡は屋田遺跡の対岸、市野川左岸の丘陵尾根上に位置している。寺ノ台古墳はいわゆる山寄せ式の構築方法を示し、墳丘は確認できない。石室は奥壁のすばまる半楕円形を呈し、凝灰岩割り石により構築され、板状緑泥片岩を翻石として用いている。

平古墳群の羽尾古墳は市野川左岸の丘陵斜面に位置する。石室は無袖型凝灰岩の切石を用いたもので、右壁は直線的であるが左壁は胴張りを有し、湾曲しながら玄門に至る。奥壁は長方形の切石を1段に2石～3石を用い4段積みあげて構成している。

大谷古墳群は、滑川右岸の沖積地から西へ入る谷の最奥の丘陵の南端に位置する。愛宕塚（わたご塚）古墳は円墳で径15mを測る。内部構造は複室構造の横穴式石室で、玄室は三味線胴張りを呈するが前室は壁が直線的で正方形に近い形を呈する。岩屋古墳は墳丘は削平されているが、凝灰岩質砂岩の切石を用いて構築された胴張りを有する横穴式石室である。玄門部から前方を失っており、詳細は不明である（大谷 1989）。

下唐子古墳群は南に都幾川を望む台地縁辺に位置し、冑塚古墳と若宮八幡古墳は、それぞれ原坂口支群・塚原支群の主墳と考えられているものである。冑塚古墳は二段築成の円墳で径32mを測り墳丘の中腹に段築が認められる。内部構造は、凝灰岩切石の複室構造の横穴式石室で、玄室・前室ともに矩形プランを呈している。玄室には奥壁に平行して石棺状の施設が造り付けられている。遺物のなかで注目されるものとして、鉄地金銅張杏葉1、同雲珠1、同辻金具5、同鞍金具、鋳留金具、金具、鉄製鞍3、轡の他に須恵器（高坏7、坏3、蓋3、甌1、台付埴1、破片若干）がみられる。なお、須恵器は南比企窯跡産と考えられている（酒井 1989）。若宮八幡古墳は、円墳で径30mを測り、内部構造は冑塚古墳と同様の横穴式石室で、江戸時代の中頃には既に開口しており、遺物は不明であるが、埴輪片が周溝より検出されている。冑塚古墳より検出された馬具類は馬装がそろって副葬されており、軍事集団を率いていた者が被葬者と考えられる。若宮八幡古墳については副葬品が明らかではないが、墳丘規模も劣るものではなく石室においては冑塚古墳を凌ぐものであり、同等の被葬者が考えられる。両古墳ともほぼ同時期の6世紀末～7世紀初頭の頃の胴張りをもつ横穴式石室の初現期のものとされている。若宮八幡古墳では周溝より埴輪片が検出され、冑塚古墳には埴輪が無い点から、若宮八幡古墳が若干先行していると考えられる。これは墳丘が劣っている点と石室が整美である点よりも推定される。

附川古墳群は都幾川により開析された河岸段丘上に位置し、いずれも円墳であり25～27mを測る。内部構造としては、複室構造をもつ横穴式石室で第1号墳・7号墳・8号墳はほぼ同様のプランである。前室は玄室側より羨道側のほうがすばまる特徴がある。第7号墳については、玄室内部の奥壁に平行して造り付け石棺状の施設が作られており、礎床上に緑泥片岩の板石が敷かれている。第6号墳の石室は西壁の一部と棺床面の一部が残存していただいで全体的なプランは不明であるが他

の古墳と同様の胴張りを呈する。石室は複室状構造をとるが、他の古墳のように門柱石状により前室・玄室が区別されているわけではなく、単室構造の石室内に間仕切り石を設けて前室・玄室状に区別しているだけのものである。また、棺床面は奥壁寄りのほうが高くなっており、棺座を意識したものと考えられる。副葬品の中で注目されるものは、第7号墳では鱗状銀象嵌を鐫に施した直刀1の他、直刀2、鉄鍔10(28)、金環4、棒状金具7、刀子4、紡錘車、須恵器などを出土している。第8号墳では金銅製飾金具6の他、切子玉6、耳環6、白玉1、ガラス小玉10、直刀4、刀子2、鐙1、鉄鍔15が出土している。金銅製飾金具は長方形を呈し、文様は2条の破線により長方形の枠を作りその中に亀甲様の文様を3つ繋げたものである。

山王裏遺跡は、野本將軍塚古墳の北側、將軍塚古墳が構築された低台地より一段上がった松山台地の南斜面の肩部と斜面にかけての遺跡で古墳が2基ある。久保原古墳は、径32mの円墳で、内部構造は、破壊が激しいが凝灰岩切石による両袖型の横穴式石室で、胴張りを有する。緑泥片岩も若干検出されており、石室の一部に用いられていたと推定される。出土遺物は、耳環2、鉄片2が検出されている。上川入古墳は、径22mの円墳で、斜面に構築された山寄せ式の古墳である。内部構造は、凝灰岩切石互目積みの横穴式石室で胴張りを有する。玄門部には、緑泥片岩の一部が遺存しており玄門部には緑泥片岩を用いていたものである。副葬品は、刀子片2、耳環2、土玉24を検出している。

柏崎古墳群は、松山台地が市野川と都幾川に挟まれて大きく東方に突出した舌状台地の北側に位置する。前方後円墳のおくま山古墳・天神山古墳、方墳の8号墳、円墳の第4号墳～第6号墳がある。3基の円墳の内部構造は、複室状構造をもつ凝灰岩切石の胴張りを呈する横穴式石室でほぼ同様のものである。複室状の構造を採用しているが、門柱石による明確な区画ではなく、楣石で間仕切りをし緑泥片岩を門柱石状にはめ込んだものと、緑泥片岩を間仕切り石にしたものとの二種類ある。第4号墳・第6号墳は、玄門と羨門の施設が全く省略されて、石室の各部の境はすべて間仕切り石によって区別されているだけであり、複室構造の石室としては簡略化を示している(金井塚1968)。また、第6号墳の玄室には緑泥片岩の板石を用いた造り付けの石棺状施設が設けられている。本古墳群の石室構築用材の主材は凝灰岩切石であるが、緑泥片岩をも併用している古墳群である。

吉見丘陵の尾根上に築成されたかぶと塚古墳は、二段築成の径28mの円墳で繪輪・葺石などの外部施設は全く認められない。内部構造は、凝灰岩質砂岩の載石による複室構造の横穴式石室で玄室は胴張りが大きい、前室の壁は直線的である。副葬品のなかで注目されるのは、円頭大刀と須恵器である。円頭大刀は柄の部分に銀線が螺旋巻きされたものである。須恵器は前室から出土したもので、有蓋高坏6、同蓋4、無蓋高坏5、匙2、有蓋短頸壺2、脚付長頸壺1、同蓋1、長頸壺1、平瓶3、坏1などである。須恵器は5類に分類でき、羽尾窯跡群産と考えられるものが最も多く、畿内産・静岡県湖西産を3点含んでいる(酒井1989)。

若宮八幡古墳・冨塚古墳・かぶと塚古墳は、墳丘としては円墳で規模もさほどの差異がない。しかしながら石室プラン・奥壁構成では3者ともに異なるものである。また副葬品の須恵器では、冨塚古墳は南比企窯跡群産、かぶと塚古墳は羽尾窯跡群産と副葬品の供給源が異なり、窯跡群の掌握者の違い、あるいは被葬者の系譜(血族・親族集団だけでなく、出自を異にする集団が同族関係の

中に組み込まれていったもの)の違いによるものと考えられる。“馬具類”の副葬古墳と“拵え付大刀”の副葬古墳といった差異にも表れている。

諏訪山古墳群は都幾川とその沖積地を望む高坂台地の北縁に分布している。この古墳群の形成は前方後方墳の諏訪山29号墳に始まり、次いで前方後円墳の諏訪山古墳・浅間神社古墳・高済寺古墳を中心に小円墳群で形成されている。1号墳は2基の粘土槨を内部構造とし、副葬品で注目されるものとして、1号槨より剣2、2号槨より馬具類(轡1、辻金具4、鉸具1)と青銅製鈴付腕輪1、垂飾10数片が検出されている。内部構造に横穴式石室をもつ古墳は、3号墳・4号墳・6号墳の3基である。3号墳は凝灰岩質砂岩の切石を用いた片袖型の横穴式石室、4号墳は凝灰岩質砂岩の切石を用いた無袖型の横穴式石室で玄門部がすばまるプランを呈する。6号墳は破壊を受けており明確でないが、凝灰岩質砂岩の切石を用いた横穴式石室と推定されている。また、4号墳・6号墳より埴輪が検出されている。

岩殿丘陵は物見山を頂点として、樹支状の谷が発達し、丘陵を分け、支丘上に舞台・桜山・田木山・根平・駒廻の各古墳群が占地する。

舞台古墳群は、東端に派生する支丘上にあり、北側に越辺川の支流九十九川が東流している。1号墳は11m弱の墳丘が認められ、内部構造は凝灰岩の切石を用いた羽子板状の横穴式石室で玄門は緑泥片岩の板石を立てている。出土遺物は直刀3、鉄鏃8、刀子7、鏝5、須恵器10である。2号墳は鬼高期末頃の住居跡の上に構築されている。1号墳と同様のプランの石室と推定されるが、奥壁のみ湾曲している。前庭付近の楕円形ピットより土師器杯・埴・鉢・甕が検出された。

桜山古墳群は岩殿丘陵の東縁に位置し、東からは入る小支谷を挟んで南北の2群に分かれる。古墳は13基でいずれも円墳である。周溝は断続的に巡るものと全くないものもある。内部構造は、全て横穴式石室で凝灰岩切石を用いたもの4基、河原石を用いたもの9基であるが、緑泥片岩を一部使用した古墳もあり、細分すれば5つに分けることができる。

凝灰岩切石を用いて構築された石室を有するものは1号墳・7号墳・12号墳の3基で単室構造で胴張りを持つものである。出土遺物は1号墳では耳環2、直刀1、前庭部より須恵器フラスコ形長頸壺1、7号墳では直刀1、12号墳では周溝より須恵器甕・長頸瓶・平瓶を出土している。

3号墳は凝灰岩質砂岩を用いた単室構造の横穴式石室で胴張りを呈する。奥壁は欠失しているが緑泥片岩の板石を使用していたものと判断されるものである。耳環1、直刀1が出土している。

河原石のみ使用のものは4号墳・5号墳・6号墳でいずれも遺存状態が悪く、6号墳のみ胴張りをもつ石室であると推定される。

河原石乱石積みの横穴式石室で僅に胴張るプランで、奥壁に緑泥片岩の一枚石を用いる古墳は2号墳・9号墳で、周溝は持たない。

河原石乱石積みの横穴式石室で、掘石として凝灰岩質砂岩、玄門として緑泥片岩を使用していた古墳は8号墳・10号墳・11号墳・13号墳の4基がある。出土遺物は、8号墳では耳環2、須恵器細頸壺1、平瓶2、10号墳は耳環2、須恵器埴瓶1・平瓶1、11号墳は土師器鉢が検出されている。

桜山古墳群では、隣接する古墳においても石室構築用材の違い、凝灰岩質砂岩・河原石の2種類が認められる。主用材の石のほか緑泥片岩を用いるもの、更に3種類の石材を用いる石室等、他

の古墳群に見られるような統一性が認められず、系統の異なる古墳が混在する何等かの背景があると考えられる。

田木山古墳群は尾根上にある古墳群で、一基ずつ独立して構築されている。1号墳は、径12.5mの円墳で、墳丘の円礫の礫群は葺石と考えられる。内部構造は、複室構造の凝灰岩切石を用いた両袖型の横穴式石室で、緩やかな胴張りを有しやや狭長なものである。副葬品は、大刀2、小刀1、刀子2、金環2、刀装具2を検出した。2号墳は径18mの円墳で、内部構造は、複室構造の凝灰岩切石を用いた両袖型の横穴式石室で、胴張りを有する。前室の玄門部の梱石の下には緑泥片岩が敷かれ、前庭部には片岩の細片が敷き詰められ、前庭部前方の掘り鉢状ピットへと続いている。副葬品は、須恵器環2のみである。

根平古墳群は、南東に派生する支丘上の尾根上に位置する。1号墳は径10mで、内部構造は扁平河原石乱石積み、僅かに胴の張る横穴式石室である。天井石には片岩が用いられたと推定される。2号墳は、径19mの円墳であり、内部構造は凝灰岩の切石を用いた「羽子板状」プランの横穴式石室である。石室は両側壁に門柱石の抜かれた痕跡が明瞭に確認され、複室構造と推定されている。羨道と前室の玄門部には梱石が置かれ、門柱石の存在が認められる（今井 1980）。羨道は扁平な河原石が用いられ、棺床面より一段低くなり礫の敷かれた痕跡はない。この構造は舞台2号墳との奥壁の湾曲が類似し、更に舞台1号墳は単室で、羨道部分は凝灰岩切石で床面には礫が敷かれ羨道部前面に羨道部の延長として河原石を並べてあり、羨道部より一段低くなり地山を床面としており、羨道と前室との差異はあるが機能を別とすれば、構築方法として同様の構造を示すものである。

駒堀古墳群は、支丘の先端に位置し、1号墳は、礫積み的小型竪穴式石室で全長1.6m、幅0.55mで、棺床面には河原石が敷かれている。2号墳は、破壊が著しいが、河原石を用いた横穴式石室と推定された。石室を囲む後込めの粘土は、石室を全周せず3つに分かれていた。周溝も全周せず、3つに分かれた溝である。

三千塚古墳群は、比企丘陵の東北部、低い山陵尾根上に8支群に分かれて分布している。山陵の最高所に帆立貝式の雷電山古墳が築造され、これを中心に第3支群の弁天塚古墳、第5支群の秋葉塚古墳、第8支群の長塚古墳の3基の前方後円墳と円墳群で構成されている。

雷電山古墳は、全長86mの帆立貝型前方後円墳と推定され墳丘は3段築成である。古墳群の中で最古のものである。

第3支群の弁天塚古墳は、全長40mの前方後円墳で、埴輪を持ち、緑泥片岩による竪穴式石室と推定されている。この支群の円墳には、内部構造として竪穴式石室のものと横穴式石室のものが混在している。

第5支群の秋葉塚古墳は、全長44.5mで前方が発達した前方後円墳で、埴輪は無く、内部構造は後円部に片袖型横穴式石室、前方部に竪穴式石室がある。竪穴式石室と横穴式石室が併存することから、横穴式石室の導入時期の現象と見ることもできる。この支群は内部構造が横穴式石室である円墳以外に、粘土床をもつ円墳、検出されなかった方墳等が存在する。総体的に古い様相を示す支群であり、雷電山古墳に最も隣接して分布する支群であることも注目される。

第8支群の長塚古墳は、全長37mの前方後円墳で埴輪をもち、内部構造は秋葉塚古墳と同様に後

円部に片袖型横穴式石室、前方部に竪穴式石室をもつ。この支群の円墳は、内部構造として竪穴式石室をもつものが多く、また、丘陵斜面には比丘山横穴墓群も存在する。

古里古墳群北田支群は、和田川右岸の微高地上に東西に広がる。1号墳は、径20.3mの円墳で凝灰岩を用いた横穴式石室と推定される。2号墳は径15.3m×12.2mの円墳で、内部構造は凝灰岩の切石を用いた切石切組積みの横穴式石室で顕著な胴張りを呈する。3号墳は根石のみの遺存で、凝灰岩の切石を用いた横穴式石室で長方形プランを呈する。野原古墳は著名な隔る埴輪を出土した前方後円墳で、内部構造は前方部と後円部とから検出された凝灰岩の切石を用いた横穴式石室である。後円部の横穴式石室は、片袖型で矩形を呈するが奥壁幅より玄門部幅が僅かに狭くなる。前方部の石室も片袖型であるが胴張りを呈する石室である。副葬品は、後円部石室から直刀2、刀子3、鉄鏃19、前方部石室から直刀1、刀子破片が検出されている。円墳群については、昭和39年に立正大学考古学研究室が調査している。そして本古墳群の成立過程を四期六亜期に分類している。内部構造は、凝灰岩切石横穴式石室→粘土室→粘土棺→河原石積竪穴式石室的横穴式石室と変化していくと捉えている。

円正寺古墳群は、小江川の沖積地に臨む小台地上に野原古墳群と小江川の沖積地を挟んで対峙する位置にある。円正寺古墳は、全長30mの帆立貝型前方後円墳で墳丘に埴輪列が確認されている。他に2基の円墳が存在し、2号墳の内部構造は横穴式石室と推定されている。

瀬戸山古墳群は、比企丘陵北東端の和田川と吉野川に挟まれた台地上に位置している。伊勢山古墳は、小江川が和田吉野川に合流する近くの台地縁辺に築造された、全長41mの前方部が発達した前方後円墳である。内部構造は、後円部にある凝灰岩切石による片袖型の横穴式石室である。副葬品は、大刀1、刀子1、鉄鏃片、書1、金環1が検出された。1号墳は径28mの円墳で、内部構造は凝灰岩切石組積みの横穴式石室で、壁は直線的である。埴輪は認められていない。薬師寺1号墳は径28mの円墳で、内部構造は凝灰質砂岩切石の切組み積みの胴張りをもつ横穴式石室である。

伊勢山古墳と墳丘規模や横穴式石室の類似する古墳は同じ小江川流域の野原古墳のほかに、三千塚古墳群の秋葉塚古墳・長塚古墳を挙げることができる。

黒田古墳群は、荒川左岸の河岸段丘上に立地し、荒川が扇状地を形成した扇頂に近い地域にあたる。前方後円墳と円墳によって構成され、2号墳が全長41mを測る前方後円墳、他の円墳は径10.5m～18.0mを測り、墳丘より埴輪片、須恵器片が検出された。1号墳では、石室入口前に埴輪列と埴輪から葺石の一部が確認されている。11号墳は、墳頂から帽子形埴輪・靱形埴輪が、周溝より朝顔形埴輪・円筒埴輪が検出されている。内部構造は、いずれも河原石乱石積みの横穴式石室で、石室プランは4号墳の片袖型を除くと他は全て無袖型であり、特に狭長な特色をもつ。石室構築用材は河原石であるが、奥壁に関しては横長立方体状の礎を積みあげた9号墳、凝灰岩を用いた7号墳・8号墳、大型の片岩を積みあげた11号墳のように多様である。玄室と羨道を区別する欄石に関しても、扁平気味の礎が1号墳・7号墳・10号墳、横長礎が9号墳、緑泥片岩が3号墳、凝灰岩の柱状石が6号墳などとなり一定してはいない。

出土遺物で注目されるものとして馬具類があり、1号墳より甕形鏡板付書1、環状鏡板付書2、鎧靴2、4号墳より鉄地金銅張り雲珠3、鉸具2、鉄地金銅張飾金具、兵庫鎮付環状鏡板付書1が



出土している。須恵器は、1号墳より高坏・提瓶、3号墳より甕、6号墳より提瓶・短頸壺が出土している。

黒田古墳群の周辺の古墳群は、荒川左岸にあるものとして黒田古墳群のほか見目古墳群・三ヶ尻古墳群・小前田古墳群、右岸のものとして鹿島古墳群・塚原古墳群・箱崎古墳群などがあるが、いずれも河原石積みの横穴式石室であり、一部の奥壁・玄門または造り付け石棺などに片岩を用いたものも含まれている。玄室プランは、無袖型の短冊形や両袖型の胴張りを有するものの2形態がみられるが、主流は胴張りを有するものである。石室構築材として片岩は河原石とともに用いられる例も比較的多く、併用されて広範囲に広がっている。その点、黒田古墳群内に凝灰岩を併用した古墳が存在する点が注目される。

苦林古墳群は、毛呂山台地の越辺川流域に広がり西戸、川角、大頸、玉林寺に及ぶものである。前方後円墳は玉林寺に長塚古墳と瓢箪塚古墳がある。瓢箪塚古墳は、緑泥片岩と凝灰岩により石室が造られており、直刀2、馬具、鑑、銀環3、須恵器壺2を出土している。西戸の毛呂山109号墳は、火山岩質の自然石により構築された胴張りを有する横穴式石室である。

勝呂古墳群は、越辺川右岸の坂戸台地の北縁に位置し、前方後円墳の雷塚古墳・洞山古墳を中心とし小円墳により構成されたものである。新町古墳(坂戸36号墳)は、径15mの円墳である。内部構造は、河原石積みの胴張り(馬蹄形)をなす横穴式石室である。副葬品は、金環1、銅環2、刀子2、鉄鏡片などである。坂戸56号墳は、越辺川・高麗川両河川の開析した沖積地を臨む坂戸台地北端に位置する。墳丘は径11mの円墳である。内部構造は、胴張りを有する横穴式石室で凝灰岩の切石積みである。副葬品は、直刀2、水晶切子玉1、金環・銀環各1である。新山古墳群中の1基である坂戸65号墳は、凝灰岩切石を用いた胴張りを有する横穴式石室で、羨道は羨門寄りより屈曲している。

入古墳群は、越辺川右岸の毛呂丘陵の東端に広がる坂戸台地上に形成され、善能寺・小山・北峰・成願寺地区に分布している。善能寺地区の円墳は埴輪と葺石、小山地区の円墳は埴輪を伴ない、北峰地区の摩利支天塚古墳(坂戸80号墳)は、円墳で径15mで、内部構造は自然石乱石積みの横穴式石室である。副葬品は、卵形鐔の直刀1、直刀片1、金銅環2、銀環1、銅環1、鉄鏡片である。山王塚古墳(坂戸91号墳)は、円墳で径12.5m、内部構造は馬蹄形を呈する横穴式石室で、馬具、金環、直刀、瑪瑙勾玉3、碧玉製勾玉1、管玉2、ガラス玉3、練玉1を検出している。

高麗川右岸の浅羽地区に土屋神社古墳があり、前方後円墳で全長50mを測る。内部構造は凝灰岩と緑泥片岩を用いた横穴式石室である。

入間台地の南縁を入間川の支流である小畔川が流れ、同左岸流域では、小堤山神古墳・西原古墳を始めとする下小坂古群、西原古墳の東方にあるどうまん塚古墳のほかに、鶴ヶ丘稲荷神社古墳・東洋大学工学部敷地内の古墳群等がある。

鶴ヶ丘稲荷神社古墳は、20.5m×21.0mの方墳で、内部構造は凝灰岩切石による複室構造の横穴式石室で、いわゆる羽子板状を呈している。緑泥片岩による棺座を設け、玄室と前室との境の柵石にも緑泥片岩を用いている。奥壁・羨道部にも緑泥片岩が用いられていたと推定される。東洋大学工学部敷地内に2基が認められる。1号墳は径約18mを測り、凝灰岩切石による横穴式石室で玄室

の左壁と奥壁の一部が残存しているだけで、詳細は不明である。棺床は黒土を敷き固めたもので、礎床ではないとされている。3号墳は封土中から多量の凝灰岩の断片が検出されただけである。

下小坂古墳群の1号墳は、径26×32mの円墳で葦石・埴輪はない。内部構造は、木炭層で粘土で覆われている。副葬品は、直刀1、鉄鍔11、ガラス小玉198、刀子1が検出された。3号墳は、径24.0×30.5mの円墳で葦石はなく、円筒埴輪が南側墳麓に7基樹立されていた。内部構造は、粘土層で内面全体に朱が塗られていた。副葬品は、直刀1、管玉13、辻金具4、楕円形鏡板付轡1、鉸具2が検出されている。4号墳は、前方後円墳で、葦石はなく円筒埴輪片が検出されている。内部構造は、横穴式石室で破壊が激しいが、それでも副葬品は、管玉13、勾玉1、水晶玉14、小玉64、青銅製銅片1、直刀片2が検出されている。

小堤山神古墳は、下小坂古墳群の南端にあり、径55×63mの円墳である。内部構造は、角岩の切石と緑泥片岩の細片によって構築された、単室構造の横穴式石室であり、玄室は若干胴張り呈している。副葬品は、銅地金張りの耳環4、鉄剣1が検出されている。

西原古墳は、同古墳群の東端にある帆立貝型前方後円墳で、全長31.8mを測る。内部構造は、後円部中央にある簡略化された粘土層である。前方部北側の周溝より、朝顔形円筒埴輪、人物埴輪、馬形埴輪、須恵器片が検出されている。

どうまん塚古墳は径24.5mの円墳で、内部構造は棺の両端に白色粘土を詰め木棺直葬である。遺物は、擬銘文帯変形獣列鏡1、滑石製白玉162、直刀2、鉄鍔2東、桂甲1、辻金具1、剣菱形杏葉3、楕円形鏡板付轡2、十字形鋳留金具2、鉸具3、ビジョー1、剣状小形利器1、斧頭1、磁石1などが出土している。

牛塚古墳は、川越台地と入間台地を開削して流れる入間川左岸の台地南西端上に築造されたものである。三段築成の墳丘をもつ前方後円墳で、全長47mを測る。内部構造は、二次的な改修が行われた河原石積み横穴式石室である。第一次（築造当初）の石室は玄室は河原石積み、羨道及び羨門部は粘土を張った土壁によるものである。玄室のプランは、僅かに胴張りのある隅丸長方形を呈する。第二次の石室は、片袖型の横穴式石室で長方形を呈する。玄室の床は、第一次床面の上に約40cmの高さに粘土を混ぜたロームを盛って突き固め、円礫を敷いてある。壁は、第一次の石組が崩落した後の土壁をロームあるいは粘土混じりのロームで修復したものである。第一次の遺物は、雲珠1、金銅環2、管玉2、切小玉5、練玉2、ガラス玉6、鉄鍔10、直刀片、鉄片である。第二次の遺物は、金銅製指輪2、直刀片1、刀子3、小瓦1、千段巻小柄1、鉄鍔18、金銅環3、ガラス小玉35、雲珠1、心葉形十字透鏡板1が検出されている。

仙波古墳群は、川越台地北端に位置する。山王塚古墳より鉄剣1、勾玉3、管玉1、切小玉1、葉玉8のほか、人物埴輪2、朝顔形円筒埴輪が出土している。三変稻荷神社古墳は、方墳（不整台形）で一辺20.5～25.0m測る。鼈鏡、碧玉製石釧が出土したと伝えられる。初期古墳の一つで、周溝より埴輪壺が出土した点などからも、4世紀第3四半期に属するものと考えられている（増田1986）。三変稻荷神社古墳の南方1kmの台地縁辺に愛宕山古墳（母塚）、浅間山古墳（父塚）があり、共に円墳でそれぞれ径42m、30mを測り、埴輪をもたない古墳である。他に、仙波富士之腰より直刀、素環鏡板付轡、幸町から朝顔形円筒埴輪が出土している。

小群川・入間川流域と荒川の沖積地を臨む川越台地縁辺の古墳群について、仙波古墳群に関しては明確ではないが、三変稲荷神社古墳が初現期のものとして捉えることができる。その後には下小坂古墳群とその周辺の古墳、また牛塚古墳がある場的場古墳群が形成されていったと考えられる。下小坂1号墳→下小坂3号墳→西原古墳・どうまん塚古墳→下小坂4号墳・小堤山神古墳という想定がある。前方後円墳は、西原古墳と下小坂4号墳があり、これに対し円墳のどうまん塚古墳・小堤山神古墳がそれぞれ同時期のものとして捉えることができる。古墳群は、まず円墳が構築され、内部構造に古い様相を残したまま出現し、6世紀になり横穴式石室が用いられるようになる。また、馬具類を副葬する古墳が2基存在するがいずれも円墳で、内部構造は粘土槨・木棺直葬である。入間川流域の牛塚古墳においても馬具が出土しており、前方後円墳で横穴式石室を用い、7世紀前半と考えられる。更に、仙波古墳群内の父塚古墳出土と考えられる素環鏡板付樽があり、牛塚古墳とはほぼ同時期のものと推定される。

当地域では、7世紀に入ってから横穴式石室が導入されたと考えられる。入間川流域の牛塚古墳は、河原石を用いやや胴張りを有する石室、小群川流域の下小坂古墳群の4号墳も詳細は不明であるが横穴式石室をもつ古墳である。小堤山神古墳もやや胴張りを有する石室で、チャート質の角岩の切石と緑泥片岩を用いて構築している。他に、鶴ヶ丘稲荷神社古墳と東洋大学工学部敷地内の古墳も横穴式石室であり、凝灰岩切石を用いたもので、当地域においては構築用材としては他の古墳と異なっており、比企地方との何らかの繋がりがあつたと推定される。

比企丘陵と荒川の沖積地を挟んで、荒川左岸の大宮台地縁辺部にも内部構造に凝灰岩を用いた横穴式石室もつ古墳がある。

大宮台地の最北端の下忍古墳群の三島神社古墳は、全長約50mの前方後円墳で横穴式石室と考えられており、玉及び刀が発見されたといわれている。西方の袋地区には円墳群があり、石室構築用材の凝灰岩切石や周溝状の落ち込みが発見され、また埴輪を有する古墳もある。

箕田古墳群は9基の円墳で構成されている。埴輪を伴う古墳として、2号墳・3号墳・6号墳・7号墳・8号墳をあげることができる。また、富士山遺跡よりB種横ハケを持つ埴輪がまとまって出土している。内部構造については、7号墳と宮登古墳（9号墳）が切石切組積みの胴張り横穴式石室をもつ。3号墳は、馬蹄形をした周溝をもつ34mの円墳である。周溝より須恵器大甕、円筒埴輪が出土している。内部構造は、凝灰岩切石を用いた横穴式石室で胴張りとして推定される。棺床面には、角閃石安山岩礫が敷かれていたと推定される。7号墳は、径約10mの円墳とみられる。内部構造は凝灰岩質砂岩の切石による横穴式石室で、三味線胴の玄室であり、床には凝灰岩質砂岩と緑泥片岩が敷かれていた。副葬品は、金環、瑠璃小玉、管玉、直刀、鉄鏃を検出し、また埴輪をもつ古墳である。宮登古墳は、径25×20mの円墳である。内部構造は、両袖型の横穴式石室で、胴張りを有する。石室構築材は、角閃石安山岩を面取りしてアーチ状に構築したもので、奥壁には緑泥片岩の板石を用いている。副葬品は、碧玉製管玉、水晶製切小玉、琥珀製甕玉、同製丸玉、鉄鏃、鉄釘、須恵器甕1、土師器坏、盤が検出されている。また、宮登古墳の北方の古墳は、砂岩の切石を用いた石室が構築されていた。

石室構築用材に関し、隣接する比企地方は前述してきたように地元の凝灰岩質砂岩であるが、

埼玉地方では角閃石安山岩の大型石を用いた、行田市八幡山古墳、地蔵塚古墳、葛蒲町天王山塚古墳などが築造されている。石材の入手経路から考えて、埼玉地方の豪族と密接な関係をもっていたと考えられる。

馬室古墳群は、阿弥陀堂・常勝寺・馬室小地区に分けられる。常勝寺地区には、全長30mの前方後円墳である將軍塚古墳と円墳がある。將軍塚古墳からは円筒埴輪が検出されている。浅間塚古墳は円墳で、内部構造は砂岩の切石を用いた両袖型の横穴式石室で、玄室は正方形に近く胴張りを有する。副葬品は、金環1、銀環1、鈴環1、直刀1、鐙1、刀子4、鉄鏃13、留金具2が検出されている。毘沙門山古墳は、径約25mの円墳で内部構造は不明である。下園1号墳（馬室3号墳）は、径21mの円墳で、内部構造は砂岩の切石を用いた複室構造の横穴式石室で、胴張りを有する。2号墳も径21mの円墳である。

阿弥陀堂地区の古墳は、位置または墳丘規模・内部構造・遺物の出土状況も不明である。氷川神社古墳は、砂岩の切石を用いた両袖型の横穴式石室で胴張りを有するが、詳細は不明である。

北袋古墳群は、前方後円墳を中心とする8基の古墳が確認されている。中井1号墳は、径約20mの円墳で、内部構造は、凝灰岩質切石を用いた三味線胴張りの横穴式石室である。複室構造であるが、玄室・前室の間はややくびれ、前室と羨道は間仕切石により区別されているのみで、構造よりすると柏崎古墳群の石室に類似している。

八重塚古墳群は、開析された東西に走る小支谷の北側台地上に立地している。1号墳は台地斜面を利用したもので、径20mの円墳と考えられている。内部構造は、半地下式の凝灰岩切石を用いた横穴式石室で胴張りを有する。副葬品は、刀子1本が検出されている。

川田谷古墳群は、荒川を見降ろす大宮台地西縁にある。川田谷の台地は開析谷が発達し、支丘が荒川の沖積地に突き出している。古墳群は、北から西台支群・原山支群・柏原支群・樋詰支群に分けることができる。西台支群は台地縁辺に11基以上の円墳で構成され、五領期後半の住居跡を切つて古墳が構築されている。2号墳は、径約20mで、内部構造は凝灰岩切石積みの横穴式石室と考えられる。7号墳は、径約26×24mで、内部構造は凝灰岩切石を用いた複室構造をもち両袖型の横穴式石室である。玄室は正方形に近い矩形で、前室は非常に小型である。閉塞には緑泥片岩の板石が使用されている。副葬品として、耳環5、切小玉3、丸玉14、小玉54、大刀3、鉄鏃10、須恵器提瓶、横瓶（プラスチック形長頸壺）1、鼈1が検出されている。9号墳は、径23mで、内部構造は凝灰岩切石を用いた横穴式石室で胴張りを有する。奥壁から80cmのところ切石を並べ間仕切石としている。7号墳とは異なり、複室状の石室となっている。副葬品は、耳環3、大刀2が検出され、大刀の一方には、金銅製貴金具・鞘尻金具が施されている。11号墳は、9号墳の周溝を切つて構築されている。内部構造は、凝灰岩切石を用いた横穴式石室で胴張りを呈すると考えられる。

原山支群は、舌状に突出した台地の傾斜面を中心として26基以上の古墳から構成される。埴輪が発見されており、埴輪をもつ古墳も存在したと推定される。原山23号墳は、金比羅塚古墳と呼称されたものである。墳形は不明で、内部構造は凝灰岩切石を用いた無袖型の僅かに胴張りを有する横穴式石室である。副葬品は、耳環3、鉄鏃7、短刀2、大刀2が検出されている。

柏原支群は四つの谷で切られ、緩やかな傾斜で荒川の沖積地に舌状に突出している。古墳は北か

ら第三丘と第四丘に築造されており、第三丘に城髪山古墳、第四丘にひさご塚古墳と2基の円墳がある。城髪山1号墳は墳丘が確認されず、内部構造は凝灰岩切石積みの中室構造の僅かに胴張りを呈する横穴式石室である。遺物は、耳環1、土師器杯1が検出された。2号墳も墳丘は確認されず内部構造は1号墳と同様のものである。副葬品は、切小玉9、管玉1、菘玉3、白玉3、金銅製空玉2、耳環2、短刀1、刀子3、鏝2、鉄鏃27が検出されている。城髪山1号墳、2号墳は、複室構造をもち、前室は玄室に比べ狭小なものである。西台7号墳においても前室は小型であり類似するが、玄室プランが胴張りとし矩形という基本的な違いがある。第四丘のひさご塚古墳は、全長41mの前方後円墳である。後円部西側くびれ部付近には、人物埴輪・円筒埴輪が配列されていた。石室前の周溝からも円筒埴輪が検出された。内部構造は、凝灰岩切石を用いた無袖型の横穴式石室で、玄室と羨道は、川原石を間仕切としている。また、奥壁は緑泥片岩を用い隙間に差し込み補強してある。棺床の南壁近くには緑泥片岩が敷かれている。副葬品は、直刀1、鉄鏃23、鏝、黄金具1、刀子1、環状鏡板付轡、鍔、鏡、銚、銚具、銚金具7のほか、墳丘から須恵器蓋・杯・提瓶・長頸壺・甕、土師器高杯・甕を検出した。ひさご塚古墳と東の円墳跡からは埴輪が出土しており、柏原支群は埴輪をもつ古墳群である。

桶詰支群は、埼玉県指定史跡の熊野神社古墳があり、他に羽黒山古墳・宮前古墳跡の3基の円墳が点在している。熊野神社古墳は、径38mで北西側墳丘に幅3m程の張り出し部の存在が推定されている(坂本 1986)。出土遺物は、硬玉勾玉4、瑪瑙勾玉2、瑪瑙菘玉1、碧玉算盤玉1、碧玉管玉67、瑪瑙小玉10、石鏃6、碧玉紡錘車4、滑石紡錘車1、碧玉巴形石製品2、碧玉筒形石製品4、筒形銅器1、朱小塊若干があり、他に径12cmの鏡1、刀剣類若干、白い勾玉数点があったと伝えられているが散逸している。内部構造は、粘土礫または粘土床ではないかとみられる。

側ヶ谷戸古墳群は大宮台地が鴨川により開析された支谷の左岸に位置し、7基以上の古墳からなる。井刈古墳は現存しないが、前方後円墳と考えられ、立地も他の6基が台地上に築造されているのに対し、かつての自然堤防上に築造されたものである。周溝より人物埴輪・馬形埴輪が出土している。台耕地稲荷塚古墳は、径30mを越す円墳で周溝は馬蹄形を呈する。内部構造は、凝灰岩の切石切組積み両袖型の横穴式石室で胴張りを有する。副葬品は、切小玉9、ガラス製小玉33、漆塗り木製小玉1、刀子2、大刀3、鉄鏃39が検出されている。山王山古墳は径20mの円墳であり、内部構造は半地下式で、砂質凝灰岩の横穴式石室で胴張りを有する。遺物は、大刀、刀子が出土している。

植水古墳群は、側ヶ谷戸古墳群の対岸の台地上に位置する。3基が確認され、現存しないが山王塚古墳は緑泥片岩を用いた石室である。

荒川右岸の野火止台地の北東縁に根岸古墳群がある。円墳・方墳などにより古墳群が形成されている。柘塚古墳は全長60mの前方後円墳で、墳丘から埴輪片が採集されている。一夜塚古墳は径50mの大型円墳で、内部構造は木炭塚である。副葬品は、小型方格規矩鏡、勾玉、管玉、桂甲小札、金銅製杏葉、雲朱、盞、直刀、衝角付青片が出土している。

内間木古墳群は、数基が残存するものであるが、円墳・方墳・横穴墓・地下式墓を包括する特異なものである。八塚古墳は一辺17mの方墳で、二重周溝をもち、内部構造は砂岩の切石を用いた横

穴式石室で胴張りを有する。副葬品は、金環1点を出土したものである。

左岸の上戸田本村遺跡内のくまん塚古墳は、横穴式石室に使用された凝灰岩質の砂岩が露出しており、直刀2本が出土している。

## 分布圏

横穴式石室を構築する石材としての凝灰岩質砂岩は、吉見・岩殿丘陵より産出されるもので、比企丘陵を中心として同石材を用いる古墳が展開される(第1図)。しかし、同地方においても、異なる石材を用いる古墳が存在し、複雑な様相を呈している。

まず、凝灰岩質砂岩を用いる古墳の最北西限は、荒川左岸の黒田古墳群である。石室は、河原石積みの無袖型(4号墳のみ片袖型)の胴張りを有する古墳であるが、奥壁・榿石などの一部に凝灰岩切石を用いたものである。馬具を副葬する2基の古墳を含む古墳群である。

分布の北限として明確なものは、比企丘陵の北端である和田吉野川流域として捉えることができる。古里古墳群の北田支群は両袖型で胴張りを呈する。伊勢山古墳・野原古墳とともに前方後円墳で片袖型の石室である。荒川右岸近くの万吉下原古墳においても、河原石を用いたものと凝灰岩を用いたものと、異なる石材を用いた石室が存在する。

三千塚古墳群は、5世紀前半の雷電山古墳を始めとして、長い期間に渡り古墳群を形成しており、支群によっても石材、石室形態が異なっており、詳細は不明である。

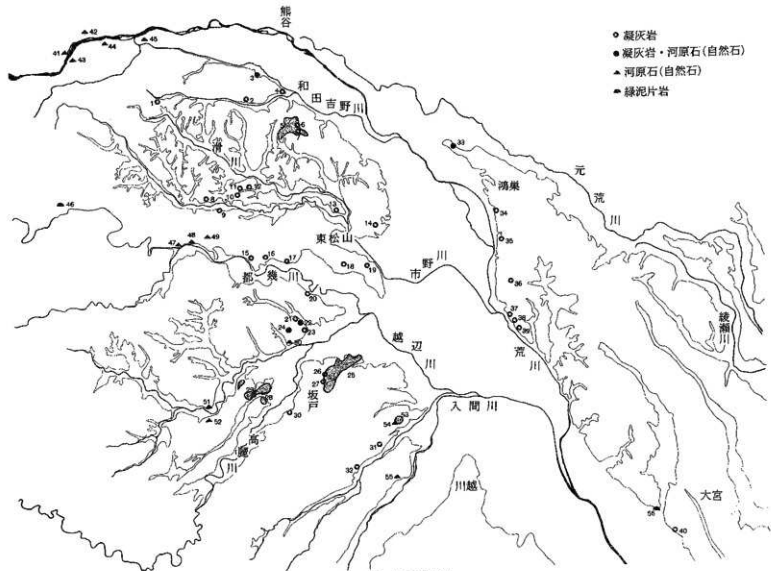
北比企丘陵の滑川・市野川流域の古墳は、凝灰岩のみを用いた古墳が主流であり、月輪古墳群においては一部が石室を用いた支群で、他は石室以外を内部構造にもつ古墳群で時期差がみられる。市野川と滑川の合流付近で両河川に挟まれた台地上に岩鼻古墳群が位置し、粘土槨をもつ古墳が主体であるが凝灰岩切石を用いた横穴式石室も認められている。

都幾川左岸の丘陵から松山台地へ移行する地域においては、山間部の緑泥片岩の産出地を近くに控える穴八幡古墳を別として、向原古墳群・寺山古墳群・西原古墳群までは、河原石のみ、または河原石と緑泥片岩を用いた石室であり、凝灰岩は用いられていない。

下唐子古墳群以東の松山台地になると、専ら凝灰岩を石室構築材とした古墳群の地域となる。一部に緑泥片岩を用いている古墳もあるが、天井や玄門として用いており壁体として用いたものはない。都幾川左岸地域には複室構造をもつ古墳が分布している。大型の石室である若宮八幡古墳・青塚古墳を始めとして、附川古墳群・柏崎古墳群をあげることができる。他には、市野川左岸の吉見丘陵のかぶと塚古墳と滑川右岸の愛宕塚古墳がある。いずれも、松山台地内とその周辺に集中している。

都幾川右岸の高坂丘陵にある柏崎古墳群は、4世紀中頃とされる前方後円墳の29号墳に始まり、内部構造は粘土槨と横穴式石室をとるものが確認されており、粘土槨の2号墳より馬具類などが出土している。

岩殿丘陵より派生する尾根上の古墳群は、凝灰岩切石積みの舞台古墳群・田木山古墳群、凝灰岩切石積み石室と河原石積みの石室が混在する根平古墳群・桜山古墳群、河原石積みのみの駒廻古墳群が分布する。



第1圖 古墳分布図

越辺川を挟んで岩殿丘陵と対峙する坂戸台地北縁と高麗川・越辺川に挟まれた毛呂山台地及びその流域にかけては、河原石積みものが主流でその中に凝灰岩切石積みものが混在する状況を呈している。越辺川右岸の勝呂古墳群・入西古墳群は岩殿丘陵と同様に凝灰岩切石の石室と河原石積みの石室が混在するが、河原石積みの石室が主流の地域となっている。西戸古墳群・川角古墳群になると河原石積み石室の古墳群である。

小群川左岸の台地上に下小坂古墳群があるが、内部構造は木炭椀・粘土椀など横穴式石室より古いものである。横穴式石室を採用しているものは、緑泥片岩と角岩を用いているものである。下小坂3号墳と近隣のどうまん塚古墳より馬具類が出土している。下小坂古墳群の西方には東洋大学工学部敷地内古墳があり、凝灰岩を用いた横穴式石室をもつ古墳である。鶴ヶ丘稻荷神社古墳も凝灰岩の切石を用いた羽子板状プランを呈する石室であり、根平・舞台古墳群と同様のものである。

入間川左岸の台地上に的場古墳群があり、牛塚古墳は河原石を用いた石室である。副葬品として、馬具類が検出されている。

その他の地域として、大宮台地西縁部、荒川が南流する地域の左岸にあたる。大宮台地西北端の箕田古墳群から川田谷古墳群、やや下って日進・与野支台にのる側ヶ谷戸古墳群、戸田市のくまん塚古墳にも認めることができる。また、野火止台地の北東縁である荒川右岸の台地上に内間木古墳群内にも認めることができる。

荒川左岸を中心として大宮台地西縁に分布しており、荒川を介在として分布圏が広がったと考えられる。大宮台地北端部には、上野産の角閃石安山岩を用いた古墳も存在しているものの、埼玉古墳群北方の八幡山古墳は、玄室床面の緑泥片岩板石の周囲に凝灰岩を敷いてあり、埼玉古墳群周辺でも用いられている。

比企丘陵を中心とし、岩殿丘陵を交換地域として小群川左岸まで分布がみられるが、入間川流域には全くみられない。大宮台地においても中心は荒川の沖積地を挟んだ比企丘陵対岸地域で他は点在するような分布状況である。

## 石室構造の系譜

横穴式石室には、単室構造と複室構造のものがあり、構築方法において技術的な差異があると考えられる。複室構造の石室は単室構造の石室と比べて、玄室と前室を連結する際の技術的な差異が認められる。従って、ここでは複室構造と単室構造の石室とはまず基本的な違いとして捉えて考えていくこととする。時期的にも単室構造の片袖型・無袖型の石室に遅れるものであるが、奥壁と側壁の組み合わせの技法など様々な方法がみられ、更に遺存状態が比較的よいものが多く分類に有効であるので複室構造の石室で分類する(第2図)。単室構造の石室においても、奥壁と側壁の組み合わせ技法の分類を適用する。

A類 若宮八幡古墳(第4図)は切石切組積み石室で、奥壁は4段の石積みである。1段目2石、2・3段目は1石、4段目は小型の切石3石によって構成されている。側壁の持ち送りに合わせて幅員を狭めているが、2段目の石は両端にL字状に切組みを施し、凸字型に加工されている。

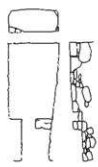


- B類 青塚古墳（第4図）も切石切組積み石室であるが、奥壁は大型の切石3石を3段積み、2・3段目は台形状の切石であるが、最上段の石の両側は側壁の持ち送りに合わせて斜めに欠き取りが施されている。前室の側壁は切組みの手法がとられず、通目積みとなっている点が若宮八幡古墳とは異なる。しかし、若宮八幡古墳と青塚古墳は基本的には同様の石室プランで構築法には若干の違いが認められるものの同系統のものとして捉えることができる。
- C類 かぶと塚古墳（第4図）も切石切組積みの石室で、奥壁は大型の切石3石によって構成されており2箇所にL字状の切組みが施されている。前室では1段目の切石は横長の大型のもので1石により構成されている。玄室は三味線胴張りを呈し、幅員指数（玄室最大幅/玄室長）が非常に大きい。
- D類 田木山1号墳（第5図）は、石室の胴張りが緩やかなもので幅員指数が最も小さく、玄室長：玄室最大幅は2：1となっている。奥壁は2石の2段積みで、1段目は縦長の大型の石、2段目は小型の切石を用いている。
- E類 愛宕塚古墳（第5図）は、田木山1号墳とプランでは大きく異なり、幅員指数は非常に大きく奥室長：奥室幅は1：1に近い値を示す。奥壁は直線的であるが非常に僅かに湾曲している。
- F類 附川8号墳（第5図）の奥壁は愛宕塚古墳ほぼ同じであるが、両側の小型の切石は大きく石室内側に内傾しており、右側においては側壁と一体化している。
- G類 柏崎4号墳・6号墳（第5図）は、小型の切石を用いた奥壁構成で、石室プランは馬蹄形を呈する。

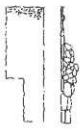
玄室プランが羽子板状のものとして、根平2号墳・鶴ヶ丘稻荷神社古墳（第5図）があり、単室構造のものを含めても舞台1号墳・2号墳（第7図）の4例しかなく、石室プランは胴張りが主体となる地域では特異なものである。

タイプ	A	B	C	D	E	F
奥壁 見通し						
奥壁 平面						
古墳名	若宮八幡古墳	青塚古墳	かぶと塚古墳	田木山1号墳	愛宕塚古墳	附川8号墳

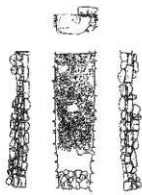
第2図 奥壁型式分類



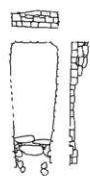
野原古墳 (後円部)



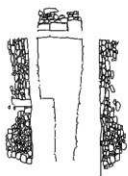
伊勢山古墳



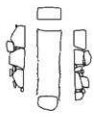
屋田5号墳



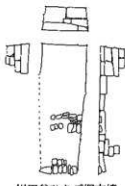
源防山4号墳



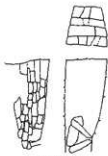
秋葉塚古墳



岩鼻1号墳



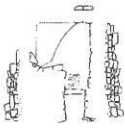
川田谷ひさご塚古墳



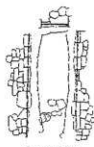
羽尾古墳



野原古墳 (前方部)

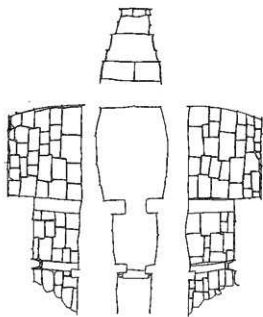


源防山3号墳

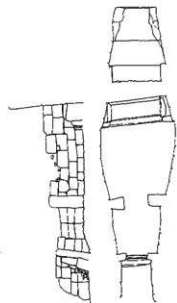


原山23号墳

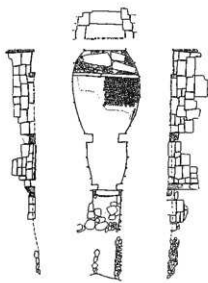
第3図 片袖型・無袖型石室



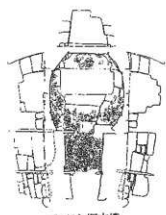
若宮八幡古墳



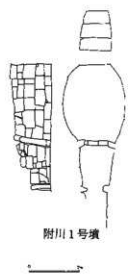
青塚古墳



附川7号墳

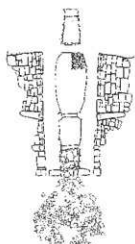


かぶと塚古墳

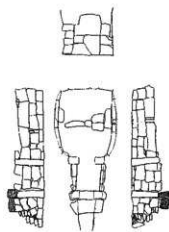


附川1号墳

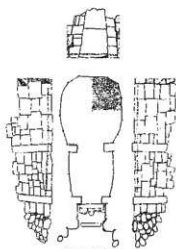
第4図 複室構造石室



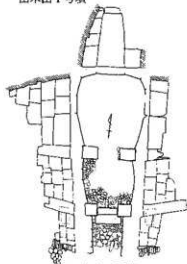
田木山1号墳



愛宕塚古墳



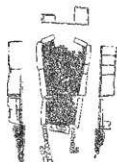
附川8号墳



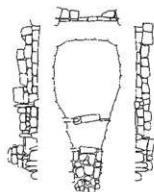
田木山2号墳



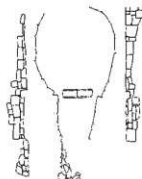
鶴ヶ丘稻荷神社古墳



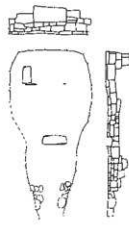
根平2号墳



柏崎4号墳

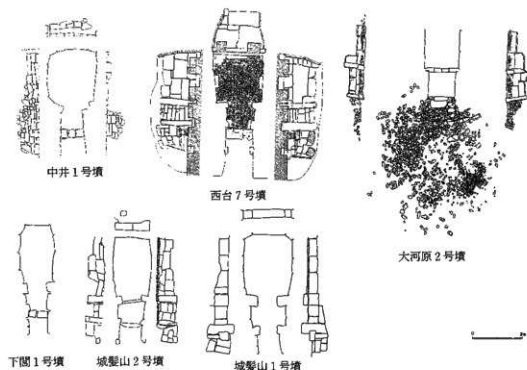


柏崎5号墳



柏崎6号墳

第5図 複室構造石室

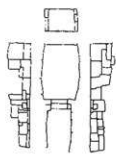


第6図 複室構造石室

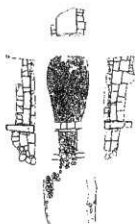
A類として附川7号墳(第4図)は、石室プラン及び棺座をもつ点などは青塚古墳と類似する。しかし、奥壁の残存している2段の切石は両端にL字状の切組みを施し凸字型に加工した切石によって構成されており、構築法の点からは若宮八幡古墳と同系統と考えられる。城髪山2号墳(第6図)は、奥壁は一段のみの遺存であるが2石の切石を用い左側の切石をL字型に加工している。石室プランは、胴張り指数も同じで若宮八幡古墳を縮小したようなプランである。しかし、前室は矮小化したものである。下関1号墳(第6図)は、奥壁は1段しか残存していないが横長の切石1石を用いたものである。前室の側壁も1石及び2石のみの使用で城髪山2号墳同様に矮小化したものである。

B類として附川1号墳(第4図)は、3石の3段積みで台形の切石で構成されたもので青塚古墳に類似するものである。その他には、1石しか遺存していないが野原古墳・屋田5号墳・岩鼻1号墳(以上第3図)がある。このうち、岩鼻1号墳は不明であるが、屋田5号墳・野原古墳は青塚古墳に先行するものである。

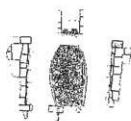
C類については、北田2号墳(第7図)が切組みはされないが台形の大型の石を用いておりプラン的にも類似している。



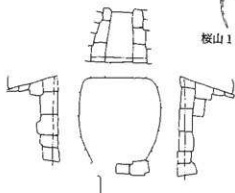
台耕地稻荷塚古墳



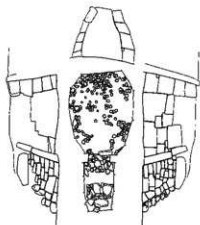
板山1号墳



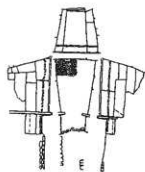
板山7号墳



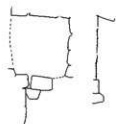
栗師寺1号墳



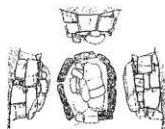
北田2号墳



舞台1号墳



浅間塚古墳



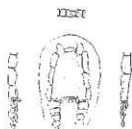
岩屋塚古墳



舞台2号墳



西台9号墳



寺ノ台1号墳

第7圖 両袖型石室

D類では、同類のものとして、板山7号墳(第7図)をあげることができるが、他に板山3号墳、石材が異なるが板山12号墳も同様の構造と考えられる。

E類として台耕地稲荷塚古墳(第7図)は、緩やかな胴張りを有する石室である。奥壁は大型の矩形の切石を垂直に立て両側に小型の切石を積みあげて構成され、奥壁は直線である。側壁は切組み積みで、壁も垂直で内傾はみられない。石室プランでは愛宕塚古墳と異なるものである。その他に浅間塚古墳(第7図)が同類である。薬師寺1号墳(第7図)は、奥壁構成は台耕地稲荷塚古墳と類似し直線的であるが奥壁と側壁の間の石材は内面が湾曲しており、E類とF類の中間的なものと考えられる。

F類として田木山2号墳(第5図)の奥壁は、田木山1号墳の縦長の大型の石と小型の切石の2段積みの切石の両側に小型の切石を数段積んだものである。右側壁の小型の切石の2段目はL字形の切石を用い、両側の小型の切石の一部にも切組みを施している。髪山1号墳(第6図)は、根石1段のみの遺存であるが、奥壁構成に関しては中央に横長の大型切石、両側に小型の切石を石室内側へ内傾させてある点から、石材の大小のさがあるものの同様のものと考えられる。前室は城髪山2号墳と同様に矮小化している。板山1号墳(第7図)は、側壁に関しては切石切組み積みで、奥壁は湾曲しており、大型の切石の両側に小型の切石を数段積みあげて構成している。また、奥壁と側壁の区分は不明瞭である。

岩屋塚古墳(第7図)の石室は切石切組み積みで、馬蹄形状のプランを呈している。奥壁は比較的大型の台形の切石の上に2石の小型の切石を横積みしている。奥壁と接する両側壁材の側面は奥壁に密着するように斜めに欠き取りが施されており(大谷 1989)、F類に類似するものである。

G類として柏崎古墳群(第5図)は前述の古墳と異なり袖を明確に示す門柱石をもたないものである。奥壁・側壁ともに小型の切石により構築されており、一部に切組み積みが見られる。6号墳は奥壁が直線的であるが、いわゆる馬蹄形を呈している。奥壁に平行に緑泥片岩の槽壁が設けられている。4号墳では、袖石として緑泥片岩の板石を立てているが、複室構造石室のなかで最も簡略化されたものである。中井1号墳(第6図)は、小型の切石によって構築されており、切組み積みも一部にみられるが乱石積みも一部にみられる。前室と羨道は根石のみの区別であり、幅は同じで単室構造とみられないこともない。

G類と異なり切組み積みではあるが、奥壁は直線で大型と小型の切石によって切組み積みをしているものがある。西台7号墳(第6図)の奥室は、やや前すばまりで正方形に近いプランを呈し、胴張りはみられない。奥壁は大型の切石2石を2段積みにし、1段目は凹字形、2段目はL字形に加工し、更に小型の切石4石を切組みしている。前室も切組み積みをしており、根石は横長の切石を用い、矮小化した石室で、城髪山1号墳・2号墳との関連を窺わせる。

この地域で特異な胴張りをもたない羽子板状のプランをもつ石室として、舞台1号墳(第7図)の奥壁は、大型の切石の両側に縦長の切石を据えて構成しており、壁面は直線をなし、E類に属する。玄門は緑泥片岩を用い、羨道の前部分については河原石を用いている。羨道部は切石と河原石によって構成されているが、両者の間には隙間があり、更に段差がある点から切石部が前室、河原石部が羨道であり複室構造をもつものではないだろうか。舞台2号墳(第7図)は根石のみの

遺存であるが、奥壁は湾曲をもった切石3石によって構成されておりF類と同類のものである。複室構造の石室は、鶴ヶ丘稻荷神社古墳・根平2号墳（以上第5図）これらも根石のみの遺存であるが、奥壁は3石によって構成されている。玄門・前門は緑泥片岩を用い、鶴ヶ丘稻荷神社古墳では奥壁の中央の石材にも緑泥片岩を用いている。

また、西台9号墳（第7図）・附川6号墳は奥壁寄りに間仕切石が設けられており、複室構造系石室という点で同じである。しかし、附川6号墳は間仕切石を境に棺床面に段差をもつが、西台9号墳に関しては同一レベルとなっている点が異なる。附川6号墳が西台9号墳に先行する。

寺ノ台1号墳（第7図）は、割り石による石室でプランも半楕円形を呈し、雑な造りとなっており、最終末の石室と考えられる。

大河原2号墳（第6図）は、切石切組み積みの石室で矩形プランを呈している。7世紀中葉に位置付けられており、胴張り石室が一般的な地域においては特異なものである。

A	B	C	D	G	
若宮八幡古墳	屋田5号墳			諏訪山4号墳 箕田7号墳 ひさご塚古墳	長塚古墳 伊勢山古墳
	野原古墳(後円部)	かぶと塚古墳		諏訪山3号墳	秋葉塚古墳 野原古墳(前方部)
	冑塚古墳	北田2号墳			
附川7号墳	附川1号墳		田木山1号墳 桜山7号墳	西台7号墳	原山23号墳
				柏崎4号墳 柏崎5号墳 柏崎6号墳	

石室分類表



E	F
台耕地稲荷塚古墳 愛宕塚古墳 浅間塚古墳 舞台1号墳※	桜山1号墳 附川8号墳 田木山2号墳 城髪山1号墳 岩屋塚古墳 根平2号墳※ 鶴ヶ丘稲荷神社古墳※ 舞台2号墳※

石室分類表

※は奥壁構成分類で亜流のものを示す。

横穴式石室で古い様相をもつ石室は無袖型・片袖型の石室で、7世紀代には胴張りをもつ石室として続くが量的には少なく、胴張りをもつ両袖型石室が主流となってくる。

片袖型石室は三千塚古墳群の位置する北比企丘陵から北縁の和田川に分布し、無袖型石室は市野川の流域と大宮台地西縁に分布する。大宮台地の分布位置は市野川が荒川に合流する地域で、石材の搬路等で関連があることは明らかである。また、都幾川右岸高坂台地北縁の諏訪山古墳群には無袖型石室と片袖型石室があり、無袖型石室が早く取り入れられている。北比企丘陵と市野川流域との石室の型の違いは両者の系譜が異なることを示し、片袖型石室は前方後円墳、無袖型石室は円墳の内部構造として用いられている。複室構造の若宮八幡古墳・青塚古墳に続くものとして、附川7号墳・1号墳をあげることができる。附川7号墳は、幅員指数で青塚古墳とほぼ同じで、石棺状施設をもつ点でも同じである。附川1号墳は幅員指数が大きく、かぶと塚古墳と同じくらいであるが、石室全体的なプランからすれば、附川古墳群は若宮八幡古墳・青塚古墳の系譜を引くものと考えられる。青塚古墳の出土須恵器は南比企窯跡産、かぶと塚古墳の須恵器は畿内産・静岡県湖西産が含まれるが羽尾窯跡産と考えられており（酒井 1989）、須恵器の供給源が異なることも一つの傍証となる。

D類の田木山1号墳と同類のものとして桜山7号墳をあげることができ、桜山12号墳・3号墳も同様のものと考えられる。D類は奥壁幅も狭く狭長なプランで胴張りも緩やかであり、E類・F類では奥壁幅を増加させ更に胴張りを大きくし空間の増大を図ったのであろう。E類はD類からF類への過渡的構造と捉えられ、D類・F類とも田木山1号墳・2号墳を祖形としたもので、若宮八幡古墳・青塚古墳・かぶと塚古墳とは系譜を異にしたものである。根平・舞台古墳群の羽子板状プランの石室もE類・F類に類するものであり、小群川左岸の鶴ヶ丘稲荷神社古墳もF類に類するもので根平・舞台古墳群とは離れているが、同一系譜を引くことは疑いが無い。

大宮台地西縁の石室は、大型の切石ではなく横長の切石を用いるものが主流で、石材運搬等の条件が考えられる。石室型式は異なるが、奥壁構成としてひさご塚古墳と西台7号墳は全く同じ構成であり、同一古墳群内で受け継がれていることが明らかである。複室構造で前室が矮小化している点では、西台7号墳・城壁山1号墳・2号墳は同一古墳群、その他の下関1号墳でも同様で、荒川左岸大宮台地で同一系譜であることが窺われる。比企地方と同じようにE類・F類の石室が多い。大宮台地北部の箕田古墳群では角閃石安山岩を用いた古墳も含まれており、使用石材の交錯地域である。

## おわりに

横穴式石室式の凝灰岩を用いた古墳について、分布・構築方法を探りその系譜を辿り古墳成立の背景に迫ろうとしたものの、不十分なものとなってしまった。青塚古墳とかぶと塚古墳の出土須恵器について若干触れたが、須恵器の需給の分布（酒井 1989）と石室構造の系譜に関連がみられ、これについて考え今後の問題点としたい。

羽尾窯跡群は6世紀末から7世紀初頭にかけて始まり、7世紀後半には消滅している。製品の出土遺跡は、寺前遺跡・寺谷遺跡・宮ノ前遺跡・屋田5号墳・寺ノ台遺跡・岩鼻遺跡が市野川流域に分布し、番清水遺跡・柏崎古墳群・古凍根岸裏遺跡の松山台地、そして都幾川流域の寺山遺跡・行司免遺跡に分布している。また、古里古墳群北田2号墳からも出土しているが、南比企産のものも出土している。

南比企窯跡群は5世紀末から奈良・平安時代まで続くものである。製品の出土遺跡は、都幾川を越えて青塚古墳・北田2号墳、窯跡群の周辺で舞台遺跡・田木山遺跡・駒掘遺跡などである。6世紀から7世紀初頭にかけては南にも広がり、越辺川を越えて大河原古墳群・川越市西原古墳・牛塚古墳・南大塚古墳がある。

市野川流域では6世紀から7世紀前半にかけては無袖型石室の分布圏であるが、7世紀代に入ると独自のものではなく、岩殿丘陵地域にある古墳群と同様の石室構造をもち、羽尾窯跡群が消滅する時期と一致する。また、南比企窯跡群の製品が7世紀代に入ると入間川左岸にまで広がる点は、河原石を主要石材とする地域に凝灰岩を用いる石室が拡大・進出していく様相とも符合する。

この須恵器の供給と石材の供給は、同じような搬出経路をもち首長層の管理のもとに供給が認められたと考えられる。

## 引用・参考文献

- 東京大学考古学研究室 1964 「埼玉県宮前村の古墳調査」『考古学雑誌』第49巻第4号 日本考古学会
- 金井塚良一 1968 「柏崎古墳群」考古学資料刊行会
- 塩野博 1968 「川田谷ひさご塚古墳」桶川町文化財調査報告書II 北足立郡桶川町教育委員会
- 塩野博 1970 「西台遺跡の発掘調査」桶川町文化財調査報告書IV 北足立郡桶川町教育委員会
- 金井塚良一 1972 「附川古墳群」考古学資料刊行会
- 川越市 1972 「川越市史」第1巻 原始古代編
- 金井塚良一編 1970 「諏訪山古墳(第一次発掘調査報告書)」東洋大学考古学研究会発掘調査報告書  
第一集 考古学資料刊行会
- 金井塚良一 1973 「比企地方の前方後円墳 —北武蔵の前方後円墳の研究(1)」『埼玉県立歴史資料館  
研究紀要』第1号 埼玉県立歴史資料館
- 塩野博 1973 「台耕地稲荷塚古墳発掘調査報告書」大宮市文化財調査報告書第6集 大宮市教育委員会
- 谷井彪・今泉泰之・野部徳秋 1974 「関越自動車道関係 埋蔵文化財発掘調査報告—III— 田木山・弁天  
山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」埼玉県教育委員会
- 塩野博・小久保徹 1975 「黒田古墳群」黒田古墳群発掘調査会
- 今泉泰之 1976 「寺山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第9集 埼玉県教育委員会
- 金井塚良一・渡辺久生 1976 「西原古墳群」考古学資料刊行会
- 増田逸朗 1977 「北武蔵における横穴式石室の変遷」『信濃』第29巻第7号
- 塩野博・駒宮史郎 1978 「川田谷古墳群」桶川市文化財調査報告書第10集 桶川市教育委員会
- 金井塚良一 1980 「入間地方の前方後円墳 —北武蔵の前方後円墳の研究(2)」『埼玉県立歴史資料館  
研究紀要』第2号 埼玉県立歴史資料館
- 塩野博 1980 「埼玉の古墳」『埼玉の文化財』第20号 埼玉県文化財保護協会
- 高柳茂 1980 「羽尾塚跡発掘調査報告書」滑川村教育委員会
- 水村孝行・今井宏 1980 「日本住宅公団高坂丘陵地区 埋蔵文化財発掘調査報告—III— 根平」埼玉県遺  
跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会
- 小久保徹ほか 1981 「日本住宅公団高坂丘陵地区 埋蔵文化財発掘調査報告—V— 桜山古墳群」埼  
玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 戸田市 1981 「戸田市史」資料編— 原始・古代・中世
- 今井宏・井上高明ほか 1984 「関越自動車道関係 埋蔵文化財発掘調査報告—XVIII— 屋田・寺ノ台」  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小久保徹ほか 1984 「埼玉県における出土遺物の研究 I」『研究紀要 1983』埼玉県埋蔵文化財調  
査事業団
- 貞末亮司 1985 「吹上 一吹上古墳発掘調査報告—」城西大学入間地区学術調査報告第1輯 城西大  
学
- 池上悟 1986 「古墳出土の須恵器について —フラスコ形提瓶—」『立正大学人文科学研究研究所研究  
紀要』第23号

- 増田逸朗・坂本和俊ほか 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 植木弘 1987 『古里古墳群 —北田遺跡・上土橋支群・駒込支群の発掘調査—』 嵐山町遺跡調査報告2 嵐山町遺跡調査会
- 埼玉県 1987 「第2章 第3節 荒川本流沿岸の古墳」 『荒川 人文1』 荒川総合調査報告書2
- 関義則・宮代栄一 1987 「県内出土の古墳時代の馬具」 『埼玉県立博物館紀要 14』 埼玉県立博物館
- 田中広明 1987 「終末期古墳の地域性 ——関東地方の加工石材使用石室の系譜——」 『土曜考古』第12号 土曜考古学研究会
- 加藤恭郎・北畑彰男 1988 「IV 大河原遺跡」 『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第1集』 坂戸市教育委員会
- 大谷徹・田中広明 1989 「東国における後・終末期古墳の基礎的研究(1)」 『研究紀要』第5号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鴻巣市 1989 『鴻巣市史』資料編1 考古
- 酒井清治 1989 「古墳時代の須恵器生産の開始と展開」 『研究紀要』第11号 埼玉県立歴史資料館
- 田中広明 1989 「緑泥片岩を運んだ道——変容する在地首長層と労働差発掘——」 『土曜考古』第14号 土曜考古学研究会
- 千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所 1989 『第10回 三県シンポジウム東日本における横穴式石室の受容』

#### 第1図 説明

1. 古里古墳群
2. 野原古墳群
3. 万吉下原古墳群
4. 瀬戸山古墳群
5. 三千塚古墳群
6. 長塚古墳
7. 秋葉塚古墳
8. 寺ノ台1号墳
9. 屋田5号墳
10. 羽尾古墳
11. 愛宕塚古墳
12. 岩屋塚古墳
13. 岩鼻1号墳
14. かぶと塚古墳
15. 青塚古墳
16. 若宮八幡古墳
17. 附川古墳群
18. 山王裏遺跡
19. 柏崎古墳群
20. 諏訪山古墳群
21. 舞台古墳群
22. 板山古墳群
23. 田木山古墳群
24. 根平古墳群
25. 勝呂古墳群
26. 坂戸56号墳
27. 坂戸65号墳
28. 入西古墳群
29. 大河原古墳群
30. 土屋神社古墳
31. 東洋大学工学部敷地内遺跡
32. 鶴ヶ丘稲荷神社古墳
33. 箕田古墳群
34. 馬室古墳群
35. 中井1号墳
36. 八重塚古墳群
37. 川田谷古墳群西台支群
38. 川田谷古墳群原山支群
39. 川田谷古墳群柏原支群
40. 台耕地稲荷塚古墳
41. 黒田古墳群
42. 見目古墳群
43. 箱崎古墳群
44. 塚原古墳群
45. 鹿島古墳群
46. 穴八幡古墳
47. 向原古墳群
48. 寺山古墳群
49. 西原古墳群
50. 駒堀古墳群
51. 西戸古墳群
52. 川角古墳群
53. 下小坂古墳群
54. 小堤山神古墳
55. 牛塚古墳
56. 山王塚古墳

研究紀要 第7号

1990

平成2年3月25日 印刷

平成2年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木384

☎0493-39-3955

印刷 望月印刷株式会社